

論文の内容の要旨

論文題目 アリストテレス哲学における人間理解の研究

氏 名 渡 邊 邦 夫

本論文は各分野の著作においてアリストテレスの基礎概念が導入される過程を追跡し、17歳で入学し20年間在籍したプラトンの学園における初期の教育を経て、アリストテレスが独創性に満ちたかれの哲学を作り上げた経過を議論の中に読み取りながら、アリストテレス哲学の特徴を描写するものである。その際、主題を、「アリストテレスが人間を倫理学や自然学や形而上学や心の哲学などのもろもろの学問的アプローチからどのように多角的に捉えようとしたか」という点に固定した。この固定的関心から、徳、友愛、誕生、死、生成消滅、変化、偶運、存在、実体、心、理性、真理などの基礎的概念に関する、アリストテレスにおける本質把握を検討してゆく。

序章では、プラトンからアリストテレスへという本論文全体の考察の趣旨を、アリストテレス『ニコマコス倫理学』第1巻7章におけるアリストテレスの倫理学立ち上げに関する宣言の趣旨の解釈という形で示す。プラトンが『メノン』で受動的に教示を待つだけの対話者メノンの対極に設定した、アカデメイアに入学する優等生的な積極性を備えた学生のひとりがアリストテレスであったと前提した上で、そのアリストテレスが、長じて自分の幸福の定義を提出した後で、「半分以上」の仕事は終わったと宣言したことを解釈する。これは、若い聴講者・読者がアリストテレスの筆になる定義を前提すべきであり、考える手間を省いて良いという趣旨でなく、かれの幸福の本質に関する主張を読者自ら吟味し、倫理の討議に参加して専門的な知の対話に入れるという意味である、と解釈した。この解

積により、アリストテレス主義を「前提」することなく、アリストテレス哲学の意義を今日のわれわれが新たに「発見」する余地が生まれる。そして、第一章以下の解釈もこれと同様に、議論の文脈に応じた、われわれによるアリストテレス哲学の「意味の発見」という目標をもっている。

第一部「共同性と規範」には『ニコマコス倫理学』の人柄の徳の問題とフィリア（友愛、愛）に関する問題を扱った三つの章を収めた。

第一章において私は、まず『ニコマコス倫理学』第2巻6章における人柄の徳の一般定義をめぐる解釈問題を紹介し、感情と行為の「中間(性)」が人柄の徳であるというアリストテレスの主張を解釈した。これは私見では、徳目ごとに関連するような感情の「量」にかかわるが、ただの「適切な」量、「ほどよさ」ではなく、特定状況の中の特定個人を取ったとき、客観的に、また厳密に定まっている量である。人は適切な有徳の行為に向け、「適切な程度の感情」を持てるように自分の行動を絶えず微調整してゆかなければならず、このような徳の学びが幼少期から順調におこなわれた「徳のある成人」は、他人にない行動のパワーと善悪のすぐれた認識を持ちうるというのが、アリストテレスの徳論の主張であると解釈した。感情のこのような基礎の上で、生物としての人間の理性的生活も可能となる。第一章末尾では、近代哲学においてこの古代哲学の根本の認識が忘れられたが、現代分析哲学と認知科学的哲学の一定局面になってその価値が再発見されているという事情にも論及した。

第二章及び第三章において、第一章の徳論解釈の成果に呼応するアリストテレスのフィリアと共同性の理解、及び共同性を前提しているように思えるわれわれの日常的幸福観念へのかれの接近方法を論じた。第二章では、徳と愛の関係を論じた。アリストテレスは私見では、幸福の理想としての「愛にあふれた生活」という万人が親しむ常識的見解に則りながら、この見解を自分で掘り下げてゆく者は、自分の理想の中に有徳な人間関係としての愛という要因が隠されているがゆえに、当の理想から、無理なくモラリスト的な徳の倫理の理想を見いだすことができると示した。この解釈の延長上で、フィリア論には〈理性としての人間〉と、理性だけからでは説明されない〈生物としての人間〉の両面を同時に捉える複眼的な視点が認められる。私見ではここに、自己のあくまで個人的な幸福とその十全な感知のためにも、他者・親しい者が初めから関与しているような人間の、反語的で、興味深い本質を、アリストテレスとともに認めることができる。第三章では、おもにフィリア論と正義論の関連を考え、アリストテレスの愛の議論が、若者の自立に向けた教育実践の文脈に属しており、正義論をこの意味で補完するといえると主張した。

第二部「生成消滅と存在」では、倫理学から自然学に場面を移す。第一部の「人間くさい局面」から転じて、人の「誕生」・「死」・「存在」を自然全体の生成消滅変化の部分的対象としてアリストテレスが確保し得た事情を究明した。

まず、第四章において、アリストテレスが「自然（ピュシス）」の学問をエレア派のパルメニデスのような生成否定論者との対決を通じて作り上げた経過を、『自然学』第1巻の解

積の形で描き出した。その学問構築過程において、アリストテレスは、パルメニデスとの架空の対話という、プラトンから受け継いだ「問答法」の手法によって議論しており、生成物が「有るものから生成する」という可能性も、「ありもしないものから生成する」という可能性も、いずれも、「生成以前のもの」の同一指定における一般問題の解決を通じて確保されると考えた。すなわち、青銅像は青銅から作られるが、生成の元にある青銅は、まさに青銅であるという事実によって像を作る元のものでありえたというわけではなく、「像になりうる特徴」のある素材であったために、その「可能性の観点」で「元のもの」なのである。この「可能性というものの現実性」というポイントを押さえることが生成の事実の適正な認識の鍵であるが、当の可能性は対応する現実性と「異なる」可能性なので、この意味で「ありもしない」と言えるとともに、可能性であるための事実的条件が存在しており、そのような「可能性としての現実性」を押さえなければならないので、この意味では「有るもの」でもある。この両方の条件を備えた「元のもの」が質料（ヒュレー）である。アリストテレスは、「まったく無」への負担に対する恐怖から生成否定論を提出したパルメニデスを適切に論破すると同時に、生成変化を一般的に語る合理的な言葉遣いの基礎を定めた。

次に、第五章では、第四章を補完する解釈を組み立て、プラトンの「ことばのうちでの考察」から出発したアリストテレスが、最終的に物的世界の中で「質料」を「形相（エイダス）」と並ぶ説明要因とすることにより、誕生、生きている間の人間の変化、死という人間の生活の外枠に対して、十全な「自然学的な対応」を確立した次第を説明した。プラトンからの出発により歩みを進めて、結局物質的要因の適切性を突き止めたことの功績は非常に大きく、「物語的」科学でなく必然性・法則・因果の諸条件を学問的に探究できる現在の科学の信頼性は、この初期の科学誕生の経過に負うところが大きいと私は結論づけた。

さらに、第六章において、アリストテレスが『自然学』第2巻4～6章で繰り広げる「偶運（テューケー）」をめぐる議論を解釈した。この解釈は、偶運という、理論のシステムからはみ出し「思考自体」の必要性を求める現象の扱いをめぐる、アリストテレスの健全な立場を確認するものであると同時に、人為と自然の区別の問題に、目的論の適切な分節という課題に応じてかれが答えた過程を示すものであり、第四章・第五章の議論を補完する役割を持つ。

第三部「実体と心」では、自然学から形而上学へと視点を変え、アリストテレスの存在論の主張の解釈をおこなった。

第七章では、『形而上学』第7～9巻の実体論の議論において重要な結論をアリストテレスが提出していると予想され、それゆえ解釈上大論争を引き起こした第8巻6章を解釈し、同時に、伝統的にアリストテレス哲学の真髄とされる実体の議論についての私の見解を要約的に示した。通説的な予想通り、質料に対する形相の優位というアリストテレス哲学のポイントは、この章でいったん定まった表現を獲得したと私も解釈する。それは、形相と質料の結合体としての個体や普遍の一性の説明という次元では、個体が同種・同形相の起

動因から生まれたという因果的事実に訴えて正当化され、形相の一性の説明という次元では、これに応じて結合体の原因としての起動因の「起動因としての内容を構成する本質的要因」の一性の根元性という観点から説明されなければならない。ただし、同時にこれを言い換えれば、「人間とは何か？」という問題に対して、本質の本当の中身と、本質から説明されるべき付帯性とがどう構造的に区別されるかという問題が、第 8 卷 6 章以後に続く最重要課題として残される。

第八章において、第七章解釈の発展を試みた。私見ではアリストテレスは『デ・アニマ』第 3 卷 6 章において、〈思考的同一指定の系列〉という発想に訴えて人間性の根元にある思考能力をみようとした。量の単位は、系列の後のほうに位置する人工的・制度的局面のものであり、悪は先立つ善の同一指定に依存し、黒も白の同一指定に依存して同一指定される。こうして「考える存在」であることの真の「元々の内容」をなすものは何かという問題への答を、かれは絞り込む。この答は、『形而上学』第 9 卷 10 章で実体論の結論としても表現される。そしてこの再定式により、「人間は自然本性的に何者であるのか？」という人間理解の究極的問題が、思考的同一指定の基礎部分に訴えて答えられたと私は解釈する。そこには、善、白、人間と近い生物種の同一指定の力が含まれる。この結果は、「ヒューマニズムの問題」を今日のわれわれが考える上でも重要なものである。